全国の図書館に、NHK 朝ドラでも大きな話題となった「サッチモ」を！！

55 年前、1967 年移民船に乗り『サッチモとジャズの故郷』ニューオリンズへ渡ったジャズ夫婦の

日本初　本格的「サッチモ」解説本

THE YOMIURI SHIMBUN　2022年(令和4年) 11月20日(日曜日)

読賣新聞

9　コラム　B・圏東 12版　2022年(令和4年)11月20日(日曜日)　読賣

夫妻でジャズの聖地との交流に尽力する

外山喜雄さん 78
恵子さん 80

撮影・佐藤俊和

サッチモのようにスイングを

顔 Sunday

ジャズの王様と呼ばれたトランペット奏者、〝サッチモ〟ことルイ・アームストロングの音楽を継承し、彼の故郷、米ニューオーリンズへ楽器を寄贈してきた。その功績が認められて18日、JASRAC音楽文化賞を受賞。「夫婦でいただけたことがうれしい」と喜雄さん。恵子さんは「サッチモの音楽と人間性のお陰で、迷うことなく続けてこられた」と目を輝かせる。

2人は早稲田大のジャズ研究会で出会い、1967年末、夫婦でニューオーリンズへ音楽修業の旅に出た。「言い出しのは私。この人となら大丈夫ってピーンと来て」と恵子さん。本場で学びと縁を得た恩返しにと94年、「日本ルイ・アームストロング協会」を設立。「銃に代えて楽器を」を合言葉に、日本で不要になった8500点を届けた。

「サッチモは11歳で銃を使ったが、少年院で楽器に出会い、世界を明るくした。だが、彼を生んだ街は銃社会で、学校の楽器はボロボロ。先人を思い出してほしかった」と喜雄さん。2005年のハリケーン「カトリーナ」、11年の東日本大震災と、両国を襲った災害の際は支援の橋渡し役となり、交流を深めた。

贈られた楽器を手にしながら、撃たれて亡くなった若者もいた。「ジャズの自由や喜びの裏には、貧困や悲劇があるのも事実」と2人は唇をかみしめる。サッチモは、NHK連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」で題材の一つになり、語り継がれている。「スペイン風邪の後にサッチモが活躍したように、コロナ後の世界は、私たちが少しでも楽しくスイングさせたい」（文化部　清川仁）

ジャズバンド「外山喜雄とデキシーセインツ」で、喜雄さんはトランペットと歌、恵子さんはピアノ、バンジョーを担当。2人は東京ディズニーランドで23年間の演奏経験も。

読売新聞でも大きく報道！！

大手町スクール　「新聞

サッチモ 魅力探る

「ルイ・アームストロング　生誕120年没50年に捧ぐ」外山喜雄・恵子共著（冬青社刊）

■デキシーランドジャズ入門
～生誕120年・サッチモの素晴らしき世界～

ニューオリンズで生まれたデキシーランドジャズの歴史とジャズ界の巨人ルイ・アームストロング（愛称・サッチモ）の魅力を学びます。演奏付き。

【講師】トランペット奏者 外山喜雄、バンジョー・ピアノ奏者 外山恵子
【日時】12月24日（土）午後2時
【受講料】3850円（会員3300円）

19　文化娯楽 電子版　2021年(令和3年)8月31日(火曜日)

ミルタノシム　音楽

サッチモ生誕120年、没50年を記念した本とCD

サッチモ生誕120年に捧ぐ

外山喜雄・恵子夫妻
解説本とCD発売

サッチモの愛称で親しまれた「ジャズ王」ルイ・アームストロング（一九〇一～七一年）は今年、米南部ニューオーリンズに生まれて百二十年、没後五十年を迎えた。日本ルイ・アームストロング協会を主宰し、バンド「デキシーセインツ」を率いる外山喜雄・恵子夫妻は生誕月の八月、サッチモに捧げる解説本とCDを発売した。

八月八日、東京・丸の内の「コットンクラブ」。夫妻は、生誕記念ライブに出演した。

早稲田大のジャズクラブで出会い、結婚。一九六八年からジャズの聖地ニューオーリンズで学んだ。七三年にバンドを結成し、恵子はピアノとバンジョーを弾く。トランペットと歌でサッチモの代表曲「ハロー・ドーリー」などを披露した喜雄（七七）は「夫婦でサッチモ五十四年」「ルイはスイングすることを教えてくれた」。演奏の合間に感謝の言葉を語り続けた。

発売した本の題名は「ルイ・アームストロング　生誕120年　没50年に捧ぐ」（冬青社）。生い立ちからジャズ王のいい話、ベスト五十曲に、伝道師として日米で表彰もされた夫妻のサッチモ体験を盛り込んだ本格的な解説書だ。

六四年の来日京都公演で、学生の喜雄は楽屋を探し当てた。「中にどうぞ」とサッチモ。トランペットがあり「見てもいい？」と頼み、笑顔の前で承諾なしに吹いてしまった。「若気の至り」と言う喜雄に、外で待っていた恵子は「悔やまれます」。

一方、CD「デキシー・マジック　ビビティ・バビティ・ブーAGAIN」は、ジャズバンド「バーリーバンド」などとして東京ディズニーランドで二十三年間演奏した曲を収録した。夫妻は「ウォルト・ディズニーも生誕百二十年。アメリカ文化を代表する二人の巨人に私たちのジャズ人生を捧げることができた」と話している。（野呂法夫）

サッチモの生誕記念ライブでトランペットを吹く外山喜雄さんとバンジョーを弾く恵子＝東京・丸の内のコットンクラブで

長3　総合　2021年(令和3年) 10月17日　日曜日

時の顔

サッチモの魅力を伝え続ける音楽家夫婦

外山　喜雄さん・恵子さん

サッチモの愛称で知られる〝ジャズの王様〟ルイ・アームストロングの音楽を半世紀にわたって演奏し続けてきた。そんなミュージシャン夫婦が共著「ルイ・アームストロング　生誕120年没後50年に捧ぐ」を出版した。「コロナ禍が続く今こそ、不遇に負けず人生の素晴らしさを唱えた精神に触れてほしい」と話す。

ヒット曲「聖者の行進」「ハロー・ドーリー」などで知られるサッチモは貧困や差別に負けずジャズの基礎をつくった20世紀を代表する音楽家。コロナで演奏活動ができない中で書き上げた共著は「演奏者の目線で彼の魅力を解き明かした自信作」と胸を張る。

2人はジャズが熱かった1960年代に大学で知り合い、サッチモを生んだ米南部ニューオーリンズで5年にわたり音楽修業。帰国後は東京ディズニーランドで20年以上活動するなど本場仕込みの演奏に定評がある。

一方、ニューオーリンズの学校に楽器を贈ったり、ハリケーン「カトリーナ」の被災者を支援したりするなど草の根交流を継続。今夏も長年集めた古いジャズミュージシャンの映像資料を現地の博物館に寄贈した。

東京パラリンピックの閉会式を締めくくったのは、サッチモの代表曲「この素晴らしき世界」。「寛容さを説いた彼のメッセージは今も生きていると感動した」。トランペット奏者の喜雄さんは77歳。ピアノ、バンジョーの恵子さんは79歳。千葉県浦安市在住。「コロナが収まればすぐにでも明るくスウィングしたい」

愛媛新聞　福井新聞
信濃毎日新聞　　他
東京新聞　　共同通信配信ニュース